

『明状元図考』訳注(稿) 四

Ming zhuang-yuan tu-kao (4)

鶴成久章

TSURUNARI Hisaki

(国際共生教育講座)

(平成二十二年九月二十九日受理)

西、汝楫已豫卜矣。

卷三(承前)

狀元唐汝楫

嘉靖二十九年庚戌 廷試傳夏器等三百三十人、擢唐汝楫第一。^{注①}

按、唐汝楫、字思濟、號小溪、蘭谿人、年三十七。吏部尙書龍之季子也。鄉試卷在魁選、拆卷、^{注②}見爲唐太宰之子、避嫌置之、與某監生之卷同

委于地、而汝楫一卷獨懸于几端不墜。監場御史取觀之、愛其文、乃抑置

榜後。入會試、掌科鄭廷鵠取冠本房、主考有難色。鄭曰、吾寧本房只中

彼一卷。豈有如此文字而不取乎。乃填第十。^{注③}鄭請刻其策、亦以嫌弗果。

及傳臚、鄭大喜自謂知文、且不負所許也。汝楫聞之笑曰、零碎文字不必

刻、只刻一篇大文字、可也。果酬其志。又廷試之前、諸同年寫家狀、至

汝楫執筆、忽屋上有聲如摧裂之狀。衆驚視、卒無所見也。回視手中筆裂

而爲四、汝楫自識爲異兆、寶藏之至今存焉。戊申歲、汝楫夢一梅樹生

於庭前、花娟靚繁盛、字隱隱見於辦中曰、明歲相逢雞水酌。^{注④}明年爲己



嘉靖二十九年(一五五〇)、殿試に臨んだ士人は傳夏器(字は廷璜、南安の人)等三百三十人であり、唐汝楫を第一位に選んだ。

考えるに、唐汝楫は、字は思濟、号は小溪、浙江蘭谿の人で、三十七歳であった。吏部尚書であった唐龍（字は虞佐、号は漁石、正徳三年進士）の末子である。郷試の答案「の成績」は首席であったが、「試験官が」答案の封を開いて見ると唐太宰の子であったので「関節の」嫌疑を避けるためにその答案を捨て置くことにし、ある監生の答案と一緒に地面に放り捨てようとしたら、汝楫の答案だけが机のはしに引っかかって落ちなかった。監試官の御史がそれを取って見て、その文章を「捨てるのは」惜しく思い、そうして順位を後ろの方にして合格者に加えた。会試に参加すると、都給時中の鄭廷鵠（字は元侍、瓊山の人、嘉靖十七進士）が経房の首席に拔擢しようとしたが、主考官が難色を示した。鄭が、「私はいつそ私の「担当した」経房ではあの答案だけを合格させたいくらいです。あれほどの文章を合格させないなどということがありましようか。」と言い、なんとか第十位に入れた。鄭は彼の「書いた第三場の」対策を「郷試録」の程文に印刷するよう請うたが、やはり「主考官が」嫌疑を避けようとしたため果たせなかった。「のちに殿試の」合格発表になって、鄭は大いに喜び「自分は文章がわかる人間だ。期待に背かずにすんだぞ。」と言った。「郷試の後」汝楫はこれを聞くと笑って、「半端な文章など印刷する必要はありません。最高の文章を一篇印刷するだけで結構です。」と言った。果たして「殿試では」その志を実現させることとなった。また、殿試に先だって、諸々の同年たちと家状を書いた際、汝楫「の順番」になって筆を執ると、突然屋根の上から何かが砕け裂けるような音がした。皆は驚いて「その方向を」見たが、結局何も見えなかった。視線を戻すと手にしている筆が四つに裂けていた。汝楫は不思議な予兆だと思い、今日に至るまで宝として大切にしまっているという。嘉靖二十七年（一五四八）、汝楫は一本の梅の木

が庭先に生えた夢を見た。つややかに咲き誇る花の花弁の中にほんやりと「明歳相逢雞水酌（来年は雞水の宴にめぐりあう）」という文字が見えた。明くる年は「郷試がある」己酉の年であり、汝楫は「進士及第を」事前に予想していた。

【注】①三百三十人……『嘉靖二十九年進士登科録』（天一閣藏明代科挙録選刊）によると、この科の進士は三百二十名であった。②拆卷……明代の科

挙では、答案を書いた人物を試験官が特定できないよう、受験生が提出した答案はまず「弥封（冒頭に記された姓名をはじめとする情報をすべて封印）」して、次にその答案を全く別な人物が「謄録（朱筆で転写）」する。その後、試験官のもとには朱筆で転写された答案のみが届けられ、試験官はそれを審査する。そして、審査が終わる合格順位まで定まったところで、別所に保管していた受験生の原答案を取り寄せ、その封を開いて審査用に転写した答案と照合する。「拆卷」とはこの照合の作業を言う。③唐太宰……太宰は吏部尚書の雅称。

④監場御史……監試官は北京・南京の郷試では御史が務めた。唐汝楫は順天府郷試に及第している。⑤掌科……『明史』卷七十四「職官三」の「掌

科」に「即都給事中、以掌本科印、故名。」と注する。『嘉靖二十九年会試録』（同）によると、工科左給事中鄭廷鵠は易経房の同考試官を務めている。⑥

本房……同考試官が自分の担当した経書房のことを言う。⑦填第十……

『嘉靖二十九年会試録』によれば、「第十一」である。⑧鄭請刻其策……

『嘉靖二十九年会試録』の程文には唐汝楫の名前が掲げられた文章は一篇もない。⑨諸同年寫家状……「家状」とは、個人の履歴、曾祖父・祖父・父に

至る三代の親族の情報、籍貫、年齢などの情報のこと。これらは、答案の冒頭に記入し、殿試の後には「進士登科録」に印刷された。ただ、その扱いの詳細については不明な点が少なくない。大野晃嗣氏「從『明代進士登科録』的編纂看『明清考試文化』中的『官年』現象」（『國際科挙研討会——第五屆『科挙制与科挙学』研討会——報告論文集』北海道大学文学研究科中国文化論講座 二〇〇九）参照。なお、『皇明歷科狀元録』では、「諸同年集于其寓寫家状……」に作る。⑩明歳相逢雞水酌……「雞」に「酉」がかけられている。

【補説】図は、唐汝楫が梅の枝を手にして花の花卉に現れた文字を見ている場面。

狀元陳謹

嘉靖三十二年癸丑 廷試曹大章等四百三人、擢陳謹第一。

按、陳謹、字德言、號環江、福建閩縣人。少以信義重於鄉。連擢春闈、進對大廷。其文莊重典則、得告君之體、擢第一。狀元錄鄉試初場之日、西角席舍五色雲起、時謂必奇士。既揭曉、中式士謁監臨御史曾佩、佩曰、今早榜出、少假寐、見龔公用卿來訪。諸士必有繼龔而出者矣。謹嘗夢蓮花二朶甚大、自空中而墜於庭。有仙童女隨蓮花而下、謂謹曰、何不登蓮花之上。如其言、蓮花冉冉而升、漸入雲端、心甚恐、俄有神人持金冠緋袍、與之服。豈非連科大魁之兆乎。



嘉靖三十二年(一五五三)、殿試に臨んだ士人は曹大章(字は一望、金壇の人)等四百三人であり、陳謹を第一位に選んだ。

考えるに、陳謹は、字は德言、号は環江、福建閩県の人である。若いときから信義の人として郷里で重んじられた。「郷試から」続けて会試に挙げられ、廷試を受けた。彼の「対策の」文章は重々しく、構成は天子に告げる上奏文の文体が整っており、第一位に抜擢された。

『狀元錄』郷試の第一場の日、「貢院の」西の角の席舎から五色の雲がわき起こり、その時「人々は」きつと立派な人物「がいる」に違いないと言った。合格発表があつて、合格した士人達が監臨官を務めた監察御史の曾佩(字は元山、臨川の人、嘉靖二十年進士)に謁見すると、佩は言つた、「今朝、合格者の一覧が掲示されたあと、しばらくたた寝していると、「夢の中で」龔用卿公が訪ねてきた。諸君らの中にきつと龔公を継ぐ者がいるに違いない。」と。謹はかつて「こんな」夢を見た。非常に大きな蓮の花が二輪空から庭に落ちてきた。蓮の花について降りてきた仙童と仙女が謹に、「どうして蓮の花の上に登らないのですか。」と言つた。その言葉通りにすると、蓮の花はだんだんと上昇してゆき、しだいに雲の中に入っていくので、「謹が」大変恐ろしく思っていると、たちまち、金の冠と緋色の袍を持った神人が現れてそれを「謹に」着せてくれた。実に続けて高位合格を果たす予兆なのであつた。

【注】①告君之體……拙訳二の「謝遷」(四七頁)に既出。②狀元錄……

『皇明歷科狀元錄』卷四。「西角席舎」を「西南角席舎」に作り、「而下」の下に「似左金童、右玉女□」があるほか、文字に若干の異同がある。③席舎……

貢院に設けられた受験生が答案を書くための部屋。『明史』卷七十「選舉二」に「諸生席舎、謂之號房。人一軍守之、謂之號軍。」とある。④中式士謁監臨御史曾佩……郷試終了後に考試官と中式挙人をもてなしたいわゆる鹿鳴宴の際

に、合格した挙人達が考試官ほかに対して行つた謝恩の儀礼のことを言うのであろう。⑤龔公用卿……嘉靖五年狀元。拙訳三の四五頁参照。

【補説】図は、『状元録』の内容を踏まえたもので、陳謹が神人から金の冠と緋色の袍を授かる場面。

状元諸大綬

嘉靖三十五年内辰 廷試金達等二百九十六人、擢諸大綬第一。

按、諸大綬、字端甫、號南明、浙江山陰人。年二十一、登浙省亞魁^{注①}。時義流播膾炙人口。春試屢挫、益加精研。丙辰、登禮闈第二、入對擢第一。年三十四、人無信之者。因其名傳已久、謂必年且長矣。

狀元録初大綬兄大綱夢見大墳一區。須臾墳裂、一硃紅棺露焉。須臾衣冠珮玉者、自棺中出、揖其兄、使入、其兄難之、忽大綬至、與冠裳者抗、以其背抵冠裳者之背、使復入。不解所以。既而待聞天卿淵、言此夢、聞曰、此地惟吾知之、乃宋狀元山陰王佐^{注②}所葬也。君其狀元乎。其背相抵、前輩後輩之謂也。果如所言。



嘉靖三十五年（一五五六）、殿試に臨んだ士人は金達（字は徳孚、浮

梁の人）等二百九十六人であり、諸大綬を第一位に選んだ。

考えるに、諸大綬は、字は端甫、号は南明、浙江山陰の人である。二十一歳で、浙江郷試の亜魁となった。「彼の書いた」時文は広く伝わり人口に膾炙した。「しかし」会試に何度も下第したこと、一層研鑽を積んだ。嘉靖三十五年の会試では第二位で、廷試では第一位に抜擢された。三十四歳の年のことであつたが、それを信じる人はいなかつた。なぜなら、その名が広まつてから既に長いことたつており、「誰もが」大綬のことを「きつと年配に違ひないと思つていたからである。

『状元録』話はさかのほるが、大綬の兄大綱（嘉靖十三年举人）は夢で一つの大きな墳墓を見た。しばらくすると「その」墳墓は裂けて、朱色の棺桶が一つ露わになった。「さらに」しばらくすると衣冠珮玉の「正装の」者が、棺の中から出てきて、彼に揖礼をし、「彼を棺桶に」入らせようとしたので、彼がこぼんでいると、たちまち大綬がやつてきて、正装の者に抵抗し、自分の背中で正装の者の背中を押し戻して、また「正装の者を棺桶に」入らせた。「大綬は」どういふことなのか「夢の意味を」理解できなかった。しばらくしてから、聞淵（字は静安、鄞の人）を呼んでこの夢について話すと聞は言つた、「この場所のことは私だけが知つてのことだけど、じつは「ここは」宋の状元であつた山陰の王佐が葬られた場所なんだ。君は状元になるだろうよ。背中で押し合つたのは、先輩・後輩という意味だよ。」と。果たしてその言葉の通りになった。

【注】① 亞魁……『嘉靖三十二年会試録』（天一閣藏明代科挙録選刊）によると、浙江郷試では第十六名であつた。「亞魁」とは、ここでは各房の首席の意か。② 時義……「時芸」に同じ。経義の文章。いわゆる八股文。③ 状

元録……『皇明歷科狀元録』卷四。ほぼ同文である。

④宋狀元山陰王佐

……王佐、字は宣子、紹興十八年(一一四八)の狀元。この科は朱熹の及第した科であり、『紹興十八年同年小録一卷』が伝存していることでも知られる。

【補説】図は、『狀元録』の内容を踏まえたもので、兄の夢の中で諸大綬が冠裳の者を背中で推して棺桶に戻らせようとしている場面。

狀元丁士美

嘉靖三十八年己未 廷試蔡茂春等三百人、擢丁士美第一。

按、士美、字邦彦、號後溪、浙江清河人。年三十九及第、授脩撰。爲人

縝密端重、以道義自持。在膠庠補稟時、甚少、年長者易之、悉分其稟、

士美怡然無幾微形於色。及登第、京師有貴人欲妻之以女、不從、名益

起。先是、卷進呈、其第一已有所擬、上覽之、弗當意。覽及士美卷、

見其策、起云、帝王之致治也、必君臣交儆、而後可以底德業之成、必人

臣自靖而後、可以盡代理之責。深愜 帝衷、用珠筆圈君臣交儆、人臣自

靖八字、寘于首。未第時、夢已坐於堂、空中有仙女一群、乘鶴翩然而

下。人皆作樂、仙音纏綿繚繞於前後。久之、復乘鶴而上。須臾有黃旗二

扇豎於門。



嘉靖三十八年(一五五九)、殿試に臨んだ士人は蔡茂春(字は裕仁、余姚の人)等三百人であり、丁士美を第一位に選んだ。

考えるに、士美は、字は邦彦、号は後溪、江蘇清河の人である。三十九歳で及第し、修撰を授けられた。人柄は緻密かつ厳肅で、道義を執り守った。在学中に廩生に採用された際、非常に若かったことから、年長者が彼を軽んじて、全部給費を分捕ったが、士美は和やかな様子で微塵も「怒りを」顔色に表さなかった。及第した時に、京師のある貴人が娘の婿にしようとしたが、いうことを聞かず、名聲が一層あがった。それより先、「第一甲の」答案を皇帝に進呈した際、第一位には既に候補があり、皇帝はそれを御覧になったが、御心になわなかった。士美の答案を御覧になり、彼の対策をお読みになると、書き出しに、「帝王が太平の治を実現すると、必ず君臣は互いに戒め合うようになり、そして後に徳業を成就することができる。必ずや臣下「の心」が安らかで落ち着いて、そうして後に「天子の」代理の責務を全うできる。」とあるのが、深く帝の心を満足させたので、玉筆で「君臣交儆、人臣自靖」

の八字に圈点を書き首席に置いた。

まだ登第していなかった時、夢の中で母屋に坐っていると、空中に仙女の一群が現れ、鶴に乗ってひらりと降りてきた。仙女がそろって音楽を演奏すると、仙楽の音色はあたりにまわりつくように響き渡った。しばらくしてから、「仙女は」また鶴に乗って登っていった。「そういうことがあつてから」まもなくして二本の黄色い旗が門に立てられていた。

【注】①三百人……『嘉靖三十八年進士登科録』（天一閣藏明代科挙録選刊）によると、この科の進士は三百三名であつた。

②膠庠……周代の学校の呼称。③補粟……「粟」は廩生、廩膳生の意。明代の学生の区分の一つで、定員が定められており、毎年の定期試験（歲試）で優秀な成績を修めた者が採用され学資の支給を受けた。

④卷進呈……殿試の第一甲の三名は、あらかじめ読巻官が候補者を選定して皇帝に推薦するのが通例であつた。『正徳』明会典卷七十七「礼部三十六・学校二・科挙・殿試・事例」に、「明日（今用殿試後二日）、讀卷官俱詣御前叩頭跪。内閣官以取定第一甲三名試卷進讀。讀訖、御筆親定三名次第。」とある。

⑤帝王之致治也……『嘉靖三十八年進士登科録』の程文に刻されている。

⑥用珠筆圈……

『皇明歴科狀元録』は、「用玉管筆硃圈」に作る。

【補説】図は、仙女達が音楽を演奏しながら天から降りてくる場面。

狀元徐時行

嘉靖四十二年壬戌^{※1} 廷試王錫爵等三百人、擢徐時行第一。

按、時行、字汝默、號瑤泉、直隸長洲人。天資秀拔、書過目不忘。父士章庠生、自幼課之有方。年十六、入庠、年十八、爲提學御史趙公鏜稱賞、命錄三場文、覽之曰、利器也。丁外艱、至辛酉六月、服闋。府公王道行、徐大節見其卷、大驚異謂、必前此未與考者、非遺才也。及拆名、

果然。牒送、督學吳公遵取爲諸郡續考之首。完試、以所試文呈二府公、皆曰、魁選無疑。京闈揭榜、中第三、是年二十七。明年大魁天下。狀元録將誕之夜、父夢神人與桂花一枝。醒猶聞香。母夢紅日照入帷間、直射其體。生而膚如玉雪。四齡出痘、醫指脇間一大痘挑之、血流紫色、

曰、此子必登高科。與狀元朱公痘正相類。至己未冬月夜半、支硎山巖端有聲如雷。居人詰朝視之、有石僅丈自山腰移下十餘丈。復轉而東、所過小石裂一縫、如虎丘試劍石之狀。識者謂、來科狀元兆也。吳中舊識云、穹窿石移、狀元來歸。宋時黃狀元由、我朝朱狀元希周皆有此兆。壬戌、時行應之。此石倚於道左、行人入天平路、每依此石以坐云。又相士

李姓者、嘗以狀元許之。故其詩有李仙許我占鰲頭之句。辛酉、時行夢行通衢、得明珠一顆、心甚異之。入室、一室光明、意此龍領下寶也。必將來取。龍果至、昂首向室內。又意此珠不可輕授、乃緘題云、臣時行謹封、跪而獻之。龍得珠而遂翔焉。是年四月、書齋忽生芝草三莖、童子不知、手去之。次日、復發二莖、色皆黃。七月、督學公約試於句容、委高淳令編卷。令寓崇明寺、時行亦寓此。吏夜編號、有四吏未寐、忽見火光起、其中一大魁星自外入。吏驚叫、令亦駭起。明旦、入白於督學、謂必大魁之兆。時所編者、吳庠卷與焉、府中王、徐、高三公、同夢龍起翔於天衢。至明、各會語相同、大異之。及冬、吳士夢報捷者至、人爭叩之、

彼且馳且答云、狀元會元皆有。除夕、指揮劉世統夢新狀元徐時行也。先余有丁嘗夢登杜正榜進士、既第、榜首非杜。及時行入領^{※2} 賜袍笏、典之者内臣杜正、是夢亦淵且巧矣。公後復姓申、晉首相。

【校勘】Ⅰ、「二」は「一」の誤り。Ⅱ、「領」は「領」の誤りか。



嘉靖四十一年(一五六二)、殿試に臨んだ士人は王錫爵(字は元馭、太倉の人)等三百人であり、徐時行を第一位に選んだ。

考えるに、時行は、字は汝默、号は瑤泉、直隸長洲の人である。生まれつき才能がぬきんでており、書物に一度目を通すと「内容を」忘れなかった。父士章(伝未詳)は生員で、幼い時から指導が適切であった。十六歳で学校に入学し、十八歳の時には提学御史の趙鐘(字は仲声、江山の人、嘉靖二十六年進士)が「才能を」賞賛し、科挙の模擬試験をやらせて、答案を見るや、「英才だ。」と言った。祖父が死去し、嘉靖四十年六月まで喪に服した。「科試に携わった」知府の王道行(字は明甫、号は龍池、陽曲の人、嘉靖二十九年進士)、徐大節(号は頤斎)は彼の答案を見て、非常に驚き怪しんで、きっとこれ以前にはまだ試験を受けていなかった者であり、「受けていながら」選にもれた人材ではないはずだと思った。答案の封を開いてみると、果たしてその通りであった。「提学主催の試験に」送り出されると、提学吳遵公(字は公路・初泉、号は恭路・九芝堂)は、各地で行われた追試の首席に取った。試験が終

わって答案を二人の知府に見せると、どちらも、「高位合格は疑いない。」と言った。南京の郷試の合格発表では第三位であり、この時二十七歳であった。翌年には状元となった。

『状元録』「時行が」生まれる前の日の夜、父は神人が一枝の桂花をくれる夢を見た。目が覚めてもまだ香気が残っていた。母は真っ赤な太陽が帷の中に差し込んできて、自分の身体をじかに照らす夢を見た。「時行は」生まれつき皮膚が白雪のようであった。「時行は」四歳の時、天然痘にかかった。医者が脇腹にできた大きな疱瘡を突き破ると、紫色の血が流れ出したので、「この子はきつと高位合格を果たすでしょう。」と言った。状元の朱「希周」公の痘瘡とよく似ていたのだ。嘉靖三十八年の冬の夜半、支硎山の峰の先端で雷のような音がした。住民が翌朝様子を見に行くと、ほぼ一丈ほどの石が山腹から十数丈下に落下して、さらに東に転がって、下敷きになった小石に割れ目が入り、虎丘の試劍石のような状態になっていた。識者は、「来科の状元の予兆である。」と言った。呉中の昔からの言い伝えでは、「穹窿山の石が移動すると、状元が帰ってくる。」と言われていた。宋代の状元黄由、本朝の状元朱希周らの時にもみなこの予兆があった。嘉靖四十一年、時行はこの予兆にこたえた。この石は道の左に寄りかかっていたので、旅人が天平路に入ると常にこの石にもたれかかって坐った。さらに、李という姓の人相見が、かつて状元になると保証してくれた。だから、彼の詩に「李仙は私が状元になるのを請け合った」という句があるのである。嘉靖四十年、時行は「このような」夢を見た。大通りを歩いていると、一粒の明珠を手に入れ、心の中で非常に不思議に感じた。部屋に入ると、部屋中が光り輝くので、これは龍のあごの下の宝珠だ。きつと「龍が」取り戻しに来るにちがいないと思った。果たして龍がやって来て、首をもたげて室内に

向かってきた。そこでまた、この珠玉は簡単に渡してはならないと思いい、そうして封をして、「臣時行、謹んで封し、跪いてこれを献ず。」と書いた。「すると」龍が珠玉を取ってそのまま飛んで行った。この年の四月には、書斎に突然靈芝が三本生えたが、童子が知らずに手で抜いた。翌日にはまた二本生えたが、色はみな黄色であった。七月は、督学が句容県で試験をすることになっており、答案の処理を高淳県の知県にゆだねた。知県は崇明寺に宿をとっており、時行もまたここに宿を借りていた。下役人が夜間答案の整理を行ったが、「そのうちの」四人が眠りに就く前に、突然火の手が上がるのを目にし、その中からひととき大きな魁星が飛び込んできた。下役人は驚いて叫び、知県もまた驚いて飛び起きた。翌朝、「督学の宿舎に」行き督学に「このことを」話すと、「督学は」きつと状元の予兆であると言った。当時、整理していたのは呉県学的答案であった。府中の王、徐、高の三公は、龍が起き上がった京師の大通りを飛ぶ夢を見た。翌日になって各々が寄り合って同じ話をするので、大いに不思議に思った。冬になると、呉の士人が「このような」夢を見た。合格を知らせる使者が来たので、人々が争って尋ねると、彼は走りながら答えて言った「状元も会元もみない。」と。大晦日に、指揮使の劉世統（伝未詳）は新しい状元は徐時行であるという夢を見た。以前、余有丁（字は丙仲、鄞県の人）が杜正榜の進士に登第する夢を見たが、合格してみると、状元は杜ではなかった。時行が「宮殿に」入って恩賜の袍笏を受領した時、これを担当したのは宦官の杜正（伝未詳）であった。この夢もまた深淵でうまくできている。公は後に姓を申にもどし、首相にまで昇進した。

【注】①三百人……『嘉靖四十一年進士登科録』（天一閣藏明代科挙録選刊）に

よると、この科の進士は二百九十九名であった。②三場文……郷試と会試の全三場で出題される科目の文章のこと。実質的には、第一場の「四書義」「五經義」、第二場の「論」、第三場の「策」を指すことが多い。③遺才……科試の際に正規の試験で選に漏れた者。④牒送……元来は、受験生の答案や履歴等の書類を、関係する学校・役所に送付すること。ここでは「続考」に送られることを言うのであろう。⑤諸郡續考……「續考」とは「遺才」の者、あるいは事情があつて科試に参加できなかった者に対する追試の意か。⑥狀元録……『皇明歷科狀元録』巻四では、「府中」の前に、「初本府牒送遺才之夜」とある。その他わずかに文字の省略があるがほぼ同文である。⑦支硎山……蘇州の西南にある山。晋の支遁が隠れ住んだことで知られる。⑧虎丘試劔石……虎丘は蘇州にある山。呉王闔閭の墓があることで知られる。ここに秦王が劔の試し斬りをしたという石がある。⑨宋時黃狀元由……字は子由、長洲の人。淳熙八年（一一八一）の狀元。⑩朱狀元希周……拙訳その三の三四頁参照。⑪天平路……蘇州府内の道の名であるが具体的な場所は未詳。⑫李仙許我占鰲頭……『賜閒堂集』（『四庫全書存目叢書』集部・第一三四冊）には見られない。（訓読）「李仙は許せり我の鰲頭を占むるを」⑬編卷……受験生の答案に弥封等の処置を行うことであらう。⑭崇明寺……句容県の東北部にあった寺。⑮編號……弥封等の処置がほどこされた答案に記号等を書いて整理する作業のことであらう。⑯魁星……諸説あるが、一説に、北斗七星の第一番目の星。文運を支配する星と考えられていた。⑰府中王、徐、高三公……よくわからない。提学の試験業務を補佐していた南直隸内の三名の知府たちのことか。待考。⑱余有丁……この科の探花。【補説】図は、『狀元録』の内容を踏まえ、徐時行が生まれるに際して父母が見た夢や不思議な光景を描いたもの。

状元范應期

嘉靖四十四年乙丑 廷試陳棟等四百人、擢范應期第一。^①

按、范應期、字伯禎、號屏麓、浙江烏程縣人。年三十九舉進士第一、授脩撰。先是壬子歲、薛應旂督學浙省、置之劣等。^②遂發憤入國子。嘗曰、

大丈夫當魁天下、瑣瑣何足較邪。已而果遂厥志。嘗夜宿杭之地、名大

茆、夢觀會試錄、有人曰、狀元者、艮山范崙、乃機坊中人^③也。既聞狀元

爲應期、細釋之、殆范公之兆乎。易曰、艮止也。^④止於山、屏麓也。范即

范、而崙亦同科、特隱屏麓於崙云耳。且湖地多絲、而夢於杭之大茆、所

謂機坊中人、得非大魁湖州烏程之應乎。天之機微而著類如此。狀元全

考應期將會試、偕一舉人見禮房吏。^⑤吏懼迎曰、昨夢狀元至吾家。二公必

居一矣。范果大魁。



嘉靖四十四年(一五六五)、殿試に臨んだ士人は陳棟(字は隆之、南昌の人)等四百人であり、范應期を第一位に選んだ。

考えるに、范應期は、字は伯禎、号は屏麓、浙江烏程県の人である。三十九歳で進士第一位に挙げられ、修撰を授かった。これより先の嘉靖

三十一年に、薛應旂(字は仲常、号は方山、武進の人、嘉靖十四年進士)が浙江の督学であった時、彼を劣等に置いた。かくて「彼は」発憤して国子監に入学した。かつて「立派な男子たるもの、天下の首席となるべきで、瑣事などどうして論ずるに足りようか。」と言い、ほどなくして果たしてその志をとげた。

かつて「私は」ある夜、杭州の大茆という地名の場所に宿った時、夢で「会試録」を眺めていると、ある人が、「状元は艮山の范崙で、「彼は」機坊の中の人である。」と言った。状元が応期であることを聞いた後、じっくり考えてみると、恐らくは范公の「状元及第の」予言なのであった。「易経」に、「艮は止なり。」と言う。山に止まるとは、「范公の号」屏麓(麓に隠れること)である。范は范だが、「范」崙(字は子大、丹徒の人)もまた同年の合格だったので、わざわざ「崙」に「屏麓」を隠して言っただけなのだ。それに湖州の地は糸を多く産しており、杭州の大茆で夢を見たということは、「機坊中の人」というのが、状元が湖州烏程の人であるしではないがあらうか。天の計らいはこれほどかすかでありつつも明らかなのであった。

『状元全考』応期が会試を受けようとしていた時期、ある舉人と一緒に儀礼を担当する下役人に会った。下役人は歓迎して言った、「昨日、状元が我が家にやって来る夢を見ました。お二人のうちどちらかがその方でしょう。」と。范が果たして状元となった。

【注】①四百人……『嘉靖四十四年進士登科録』(天一閣藏明代科挙録選刊)によると、この科の進士は三百九十四名であった。②置之劣等……『明史』

卷六十九「選舉一・郡県之学」に、「提學官在任三歳、兩試諸生。先以六等試諸生優劣、謂之歲考。一等前列者、視廩膳生有缺、依次充補、其次補增廣生。

一二等皆給賞、三等如常、四等撻責、五等則廩、增遞降一等、附生降爲青衣、六等黜革。」とある。「劣等」とは、五等以下を言う。③機坊……機織り小屋。④易曰……『周易』艮卦の象伝に見える。

⑥禮房吏……儀礼や試験業務等を掌った下級役人。

⑤狀元全考……未見。

【補説】図は、『狀元全考』の内容を描いたもの。

狀元羅萬化

隆慶二年戊辰 廷試田一儁等四百人、擢羅萬化第一。

按、羅萬化、字一甫、號康洲、浙江會稽縣人。年三十三及第。羅公嘗

止北新關、有戶部主事某、夢第一名進士來訪。明日、羅偶謁主政、主政

未悟所夢、相見亦如常禮。羅公明年傳臚第一、主政始悟曰、去年夢應矣、但有慢羅公爲愧。後羅公亦不介意。廷試後、上讀進呈十七卷、皆

不愜 宸衷、有旨取散卷讀之、得羅卷、遂擢第一。次黃鳳翔、次趙志

皐。三人皆經 聖意自取。不預進呈而獲欽取、亦希世之遇也。今羅、黃

二公官至禮部尚書矣、而趙公晉首相、盛矣哉。

是科、李公春芳主會試。取士官至相國者、王公家屏、張公位、陳公于

陞、沈公一貫、暨趙公志皐、朱公賡、凡六人。官至八座者、羅公萬

化、黃公鳳翔、李公長春、田公一儁、王公用汲、李公戴、田公樂、凡

七人。是科、兄弟同科、山東紀五常、紀克一、山西李春光、李珙。

狀元奇異編會試、夢一老人入其舟、揭去會試封條、易以第一甲第一名數

字。後果驗。

【校勘】「珙」は「璿」の誤り。



隆慶二年（一五六八）、殿試に臨んだ士人は田一儁（字は徳万、大田の人）等四百人であり、羅萬化を第一位に選んだ。

考えるに、羅萬化は、字は一甫、号は康洲、浙江会稽県の人である。

三十三歳で及第した。

羅公がかつて北新関に宿っていた時、戸部主事の某は第一名の進士が来訪する夢を見た。明くる日、羅がたまたま主事に謁見したが、主事は夢で会った「相手だ」と気づかず、面会の際普通の礼儀で接した。羅公が翌年の伝臚で狀元になると、主事ははじめて気づいて、「去年の夢が現実となった。」と言い、羅公に非礼をしたのをひたすら恥じた。その後も羅公は気にすることはなかった。廷試の後、皇帝は進呈された十七卷の答案を読んだが、すべて御心を満足させるものではなかった。勅命を出して「進呈の」候補とならなかった答案を取り寄せて読み、羅の答案を見つけ、かくて第一位に抜擢した。第二位は黃鳳翔（字は鳴周、晋江の人）、第三位は趙志皐（字は汝邁、蘭谿の人）であった。三人はみな皇帝の意向により抜擢されたのである。進呈にあずかることな

く、天子御自らに選ばれる「栄誉を」獲得するのは、世にもまれな待遇であった。今、羅・黄の二公は礼部尚書となり、趙公は首相にまで上りつめており、何とも盛んなことである。

この科では、李春芳公（既出）が会試の主考官であった。合格させた士人で官職が宰相にまで至った者は、王家屏公（字は忠伯、大同山陰の人）、張位公（字は明成、新建の人）、陳于陛公（字は元忠、南充の人）、沈一貫公（字は肩吾、鄞の人）、及び趙志臯公、朱賡公（字は少欽、浙江山陰の人）ら、全部で六人である。官職が尚書にまで至った者は、羅万化公、黄鳳翔公、李長春公（字は元甫、公安の人）、田一儁公、王用汲公（字は明受、晋江の人）、李戴公（字は仁夫、延津の人）、田樂（字は希智、任丘の人）ら、全部で七人である。この科で兄弟が一緒に合格したのは、山東の紀五常（字は一元、膠州の人）、紀克一（字は貞甫）、山西の李春光（字は輝甫、解州の人）、李瑱（字は聰甫）である。

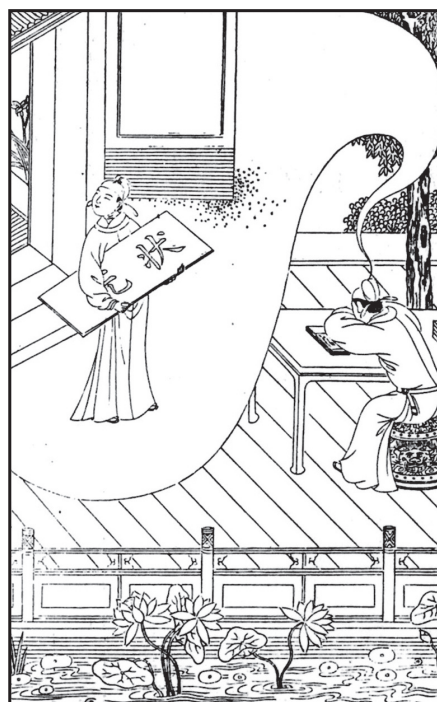
『状元奇異編』会試の際「このような」夢を見た。一人の老人が彼の「乗った」舟に乗り込んできて、会試の答案の封をはがして、第一甲第一名の数字「を書いた弥封紙」に換えた。後に果たしてその通りになった。

【注】①四百人……『隆慶二年進士登科録』（明代登科録彙編）によると、この科の進士は四百三名であった。②北新關……杭州府仁和県の北にあった関所。『明史』卷四十四「地理五」参照。③主政……六部の主事を言う。④上讀進呈十七卷……「丁士美」の条参照。⑤次黄鳳翔次趙志臯……『隆慶二年進士登科録』によれば、榜眼が趙志臯で、探花が黄鳳翔。⑥八座……六部の尚書のこと。⑦狀元奇異編……未見。⑧會試封條……「封條」は封印紙のこと、ここでは会試答案の弥封のことを言う。

【補説】図は、『状元奇異編』の内容を描いたもの。図には「兆元」の署名がある。

狀元張元忬

隆慶五年辛未 廷試鄧以讚等四百人、擢張元忬第一。^{注①}
按、張元忬、字子盡、號陽和、浙江山陰縣人。父天復、行太僕寺卿、所居與羅萬化同巷、嘗夢携其扁於家。會試時、祖塋有聲三日、往視、得金芝六莖。是科、劉城夢人以羅衣遺之曰、此第二服也。已有人先服矣。果讓張居首。時年三十四。^{注②} 明狀元考戊辰年、予聞紹興羅狀元報、因曰、來科狀元必姓張、當再出紹興。客異予言謂、不諳識術、何以先知。予解曰、昔成化二年狀元羅公倫、至五年張公昇、俱江西人。^{注③} 氣運盛於一時、是以知之。客笑曰、成化八年吳公寬吳人。然則隆慶八年亦吳姓、定是吳人邪。此言未可信。予又解曰、獨不知何公孟春餘冬錄。^{注④} 見熊入京、知京數日有火、已而果然。同輩問、何以知之。何曰、嘗讀宋書、紹興己酉熊入京、數日有火、熊字能火乃爾。同輩始服。其讀書一事、且猶響應。豈三年大魁、獨不兆合前科乎。客亦唯唯而退、終未服。至辛未科聞報、始服予言。



隆慶五年（一五七二）、殿試に臨んだ士人は鄧以讚（字は汝徳、新建の人）等四百人であり、張元忭を第一位に選んだ。

考えるに、張元忭は、字は子盞、号は陽和、浙江山陰県の人である。父天復（字は復亨、号は内山、嘉靖二十六年進士）は行太僕寺卿で、居所が羅万化と同じ横町であり、かつて彼の「状元の」扁額を家に抱えてくる夢を見た。会試の時に、祖先の墓で三日にわたって音がしたので、行って見てみると靈芝を六本手に入れた。この科では、劉城（字は玉儔、峽江の人）が「こういう」夢を見た。ある人が薄絹の衣をくれて、「これは二番目に着ることになる。既にある人が先に着ている。」と言った。果たして状元を張に譲ることとなった。この時三十四歳であった。

『明状元考』隆慶二年に、私は紹興の羅万化が状元になったことを聞いたので、そこで「次の科の状元はきつと張姓で、また紹興から出るはずです。」と言った。客は私の言葉をいぶかって、「讖緯の術に通じているのでなければ、どうして予知できましよう。」と言った。私は説明して言った、「昔、成化二年（一四六六）の状元は羅倫公で、次の五年は

張昇公「が状元」で、ともに江西の人でした。気運はある時期に一気に盛り上がるものですから、それで今回のこともわかるのです。」と。客は笑って言った、「成化八年「の状元」呉寛公は呉の人でした。すると、隆慶八年「の状元」もまた呉姓で、さだめし呉の人でしょうか。」と。この言葉は信じるわけにはゆかなかった。私はさらに説明して言った、「何孟春公（字は子元、郴州の人、弘治六年進士）の『餘冬録』のことはきつとご存じでしょう。京師に熊が入るのを見て、京師に数日後に火災が起きることを知り、しばらくするとその通りになりました。同輩が『どうしてわかったんだい。』と訊ねると。何は、『かつて『宋書』に『紹興己酉に熊が京師に入り、数日後に火災が起きた。』とあるのを読んだことがあったんだ。『熊』という字は『能』と『火』から成り立っている』からさ。」と言いました。同輩達はやっと承服しました。彼が書物で読んだ事柄ですら、「現実と」呼応したのです。どうして三年ごとの状元が、前の試験「結果」と符合しないことがありますか。」と。客はまたなるほどと言って退出したが、結局のところ承服してはいなかった。隆慶五年科で「状元の」報せを耳にして、やっと私の言うことに承服した。

【注】①四百人……『隆慶五年進士登科録』（天一閣藏明代科學録選刊）によると、この科の進士は三百九十六名であった。 ②羅萬化……前条参照。

③劉城……この科の榜眼。 ④明状元考……未見。

⑤成化二年……俱江西人……拙訳二の四三～四六頁参照。 ⑥成化八年……定是呉人邪……呉寛については拙訳二の四六頁参照。なお、隆慶年間は結局六年までで終わった。

⑦何公孟春餘冬録……『千頃堂書目』卷十二「雜家類」に、「何孟春餘冬序録六十五卷」とある。この話は、沈節甫撰『紀錄彙編』卷百五十一に収録する『餘冬序録摘抄』四に見られる。 ⑧宋書……未詳。

【補説】図は、父が羅万化の家から「状元」の扁額を持つてくるのを夢に見る様子。

状元孫繼皐

萬曆二年甲戌 廷試孫鑛等三百五十一人、擢孫繼皐第一。^{注①}

按、繼皐、字以德、號栢潭、直隸無錫人。始生時、父夢前甲戌狀元唐皐^{注②}至其家、遂名繼皐。年二十六、亦以甲戌魁天下、其相符亦奇矣。皐在庠時、郡守福清施公觀民、奇其文章氣宇、常會考而皐屢居首、隱然以大魁許之。癸酉舉鄉薦、公曰、吾所望不止此也。聯捷、公又曰、吾所望不止此也。及 廷試、施公先時盛服坐堂待報。俄而聞報至、公不覺大笑、吾素望於皐者、今果酬矣。令諸吏酌酒賀之、是日、公大醉。



萬曆二年（一五七四）、殿試に臨んだ士人は孫鑛（字は文融、余姚の人）等三百五十一人であり、孫繼皐を第一位に選んだ。

考えるに、繼皐は、字は以德、号は栢潭、直隸無錫の人である。はじ

め「彼が」生まれた時、父は先の甲戌科の状元唐皐が家にやって来る夢を見たので、かくて繼皐と名づけた。二十六歳の時、やはり甲戌科において状元となったのは、世にも不思議な符合であった。皐が学校に在学中、知府であった福清の施観民公（字は于我、嘉靖四十四年進士）は、彼の文章の風格を賞賛した。いつも諸校の学生を集めて試験すると、皐はしばしば首席となったので、状元になるものとひそかに期待した。万曆元年に郷試に合格した時に、公は、「私が望むのはこの程度ではない。」と言った。続けて会試に合格すると、公はさらに、「私が望むのはこの程度ではない。」と言った。廷試「の時期」がおとずれると、施公はあらかじめ盛装して広間に坐って報告を待った。まもなくして「合格の」報せが届いたのを聞くと、公は思わず大笑いして、「わしが日頃から皐に望んでいたことが、今実現した。」「と言い、下役人達に酒をつがせてこれ（状元合格）を祝い、この日、公は大いに酔っ払った。

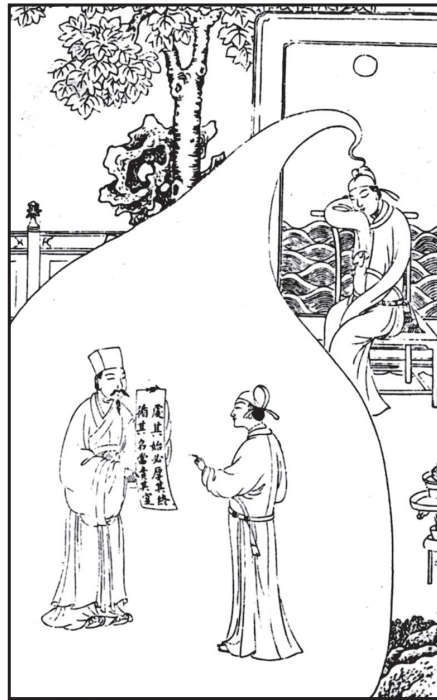
【注】①三百五十一人……『万曆二年進士登科録』（天一閣藏明代科挙録選刊）によると、この科の進士は二百九十九名であった。②甲戌状元唐皐……拙訳三の四〇頁参照。③年二十六……『万曆二年進士登科録』には「年二十五」とある。④會考……府内にあった各学校の学生を集めて試験を行ったことを言うのであろう。⑤聯捷……郷試と会試（殿試）に連続して合格すること。

【補説】図は、父が唐皐が家にやって来た夢を見る様子。図には「徳脩」の署名がある。

狀元沈懋學

萬曆五年丁丑 廷試馮夢禎等三百五十人、擢沈懋學第一。^{注①}

按、懋學、字君典、號少林、直隸宣城人。慷慨有大志、嘗題鳳凰臺云、丈夫意氣何相若、萬里風雲指顧中、每日、元魁吾分也。葬其父大參公、夢送一聯云、虔其始、必厚其終、循其名、當責其寔。^{注④}及廷對、策冒中用此語。^{注⑤}是時、聖上勵精圖治、閱此、顧謂輔臣曰、此二語、即可作狀元。遂首擢之。時年四十四。



萬曆五年（一五七七）、殿試に臨んだ士人は馮夢禎（字は開之、秀水の人）等三百五十人であり、沈懋學を第一位に選んだ。

考えるに、懋學は、字は君典、号は少林、直隸宣城の人である。意氣盛んで大志を抱いており、かつて鳳凰台に「詩を」記して、「男子の氣概はどうして似たり寄ったりであろうか、「私にとってみれば」万里の風雲もすぐ目の前にある」と言い、「狀元になるのは私の本分だ。」と常々語っていた。彼が父大參公（名は寵）を葬った際、「父が」夢の中で対句を一つ贈ってくれた、「始めを慎めば、必ず終わりを充実させる

ことができ、名に従うのであれば、実を求めなければならぬ」と。廷試の際に、対策の冒頭にこの言葉を用いた。この時、皇帝は政治に務め励んでおり、これを御覧になると、宰相の方を振り返って、「この二語こそ狀元になるべき「者の言葉」である。」と言い、かくて彼を狀元に抜擢した。この時四十四歳であった。

【注】①三百五十人……『萬曆五年進士登科錄』（天一閣藏明代科挙録選刊）によると、この科の進士は三百一名であった。②鳳凰臺……南京の南門内にあった樓台。③丈夫意氣何相若……（訓読）「丈夫の意氣は何ぞ相若ん、万里の風雲も指顧の中にあり」④虔其始必厚其終……（訓読）「其の始めを虔しめば、必ず其の終りを厚くし、其の名に循わば、当に其の寔を責むるべし」⑤策冒中用此語……『萬曆五年進士登科錄』に刻する程文では、冒頭ではなく結びの部分に「陛下、循其名、必責其實、虔其始、必厚其終……」の語が見られる。

【補説】図は、夢の中で父から対句を贈られる場面。

狀元張懋修

萬曆八年庚辰 廷試蕭良有等三百四十七人、擢張懋修第一。^{注①}

按、懋修、號斗樞、湖廣江陵人。首相居正之子也。兄嗣修前科榜眼、弟敬修同科進士。父子兄弟及親戚並列簪纓貴顯、稱極盛矣。後以罪謫云。^{注②}^{注③}^{注④}^{注⑤}

万曆八年(一五八〇)、殿試に臨んだ士人は蕭良有(字は以占、漢陽の人)等三百四十七人であり、張懋修を第一位に選んだ。

考えるに、懋修は、号は斗枢、湖広江陵の人である。首相居正(字は叔大、号は太岳、嘉靖二十六年進士)の子である。兄の嗣修(字は景仁)は前の科の榜眼で、弟の敬修(字は君平)は同じ科の進士である。父子兄弟ならびに親戚が、そろって貴顕の地位に列せられるというのは、隆盛の極みと言えよう。「だが」後に罪を得て処罰されたのである。

【注】①三百四十七人……『万曆八年進士登科録』(明代登科録彙編)によると、この科の進士は三百二名であった。②首相居正……当時、張居正は主

席内閣大学士の地位にあった。

③弟敬修……「敬修」は張居正の長子であり「弟」とするのは誤り。

④簪纓……貴人の冠の飾り。貴顕の者のこと。⑤後以罪謫……張居正は死後弾劾され、生前の榮譽・栄典を全て剥奪され、一族の者たちもまた処罰された。ちなみに、張居正父子の関節を指摘する話は諸書に見られる。

【補説】図は、進士となった兄弟がそろって内閣大学士の父に挨拶をする場面。



狀元朱國祚

萬曆十一年癸未 廷試李廷機等三百四十人、擢朱國祚第一。^{注①}

按、國祚、字兆隆、號養淳、順天太醫籍、浙江秀水人。公父精岐伯之術、爲太醫院、使所活人甚多。公自少、目不視邪色、足不履非禮之地。嘗赴通州試、試後、友人載酒、邀公飲于舟。舟至張家灣、同登岸、友人拉入酒家。有婦靚粧。公知爲妓也、急出門不停足、徒步二十餘里至通州寓。若將浼焉。鄉舉時、紫芝產于庭。嘗夢有雙頭人騎馬而前、公以爲怪、乃急策已乘馬而更前之。是科、後公一步者、李公廷機也。李公鄉會試皆元、應雙頭人之夢。夢更前之者、應公登狀元也。廷試後、李公廷機夢削髮爲僧、投一僧結爲師兄。問其姓曰、朱。閩語無髮爲元。李公心疑狀元有屬矣。臚唱、果朱公第一。公是年二十五、鄉會聯捷及第。年四十、陞禮部侍郎、今吏部侍郎推相。



万曆十一年(一五八三)、殿試に臨んだ士人は李廷機(字は爾張、晋江の人)等三百四十人であり、朱国祚を第一位に選んだ。

考えるに、国祚は、字は兆隆、号は養淳、順天府太医の籍で、浙江秀

水の人である。公の父は岐伯の術に精通しており、太医院の医官として、非常に多くの人々の命を救った。公は若い頃から、邪悪なものを見ず、非礼なところには足を踏み入れなかった。かつて通州の「州学の」試験に赴いた際、試験の後で友人が酒席を設け公を舟に誘った。舟が張家湾に着き、一緒に岸に上がると、友人は「公を」酒家に引き入れた。「そこには」美しく化粧をした女性がいた。公は「それが」妓女だと気付くと、急いで門を出て足を止めることなく、二十里あまり歩いて通州の宿舍まで戻った。危うく身を汚すところであった。郷試の際には、庭に靈芝が生えた。かつて「こういう」夢を見た、双頭の人が馬に乗り「公の」前を行くので、公は不思議に思っ、急いで自分の馬に鞭をあて、さらに彼の前に出た。この科で公より一等下の者は、李廷機公であった。李公は郷試・会試とともに首席であり、双頭の人の夢と呼応した。夢で彼のさらに前に出たということは、公が状元になったことと符合した。廷試の後、李廷機公は「こういう」夢を見た。剃髪して僧となり、ある僧のもとに身を寄せ「彼を」兄弟子とする契りを結んだ。彼の姓を訊ねると、「朱だ。」と答えた。福建の方言では「無髪」の発音は「元」の発音「と同じ」である。李公は状元は彼（朱姓）のものであるまいかと心に思った。伝臚になって、果たして朱公が第一位であった。公はこの時二十五歳で、郷試・会試に連続して合格した。四十歳の時に、礼部侍郎に昇進し、今は吏部侍郎推相である。

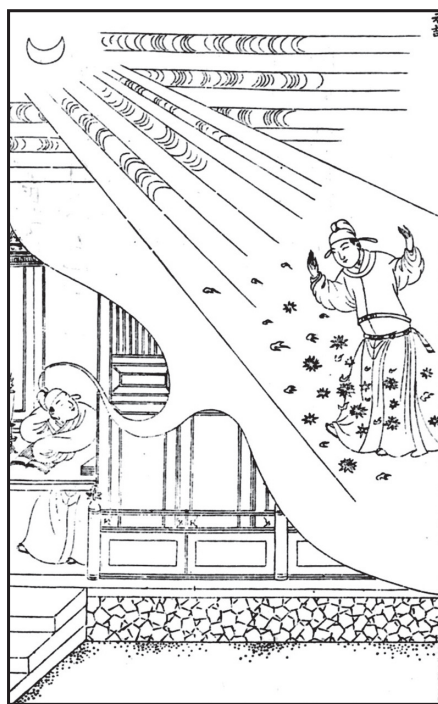
【注】①三百四十人……『万曆五年進士登科録』（天一閣藏明代科挙録選刊）によると、この科の進士は三百四十一名であった。②太醫籍……太医院官籍。祖父の彩が太医院吏目、父の儒が太医院御医であった。③岐伯之術……医術。岐伯は黄帝の臣下であった名医。④張家湾……河北省通県の南にある

港湾。盧溝と白河の会するところに位置する。⑤臚唱……「伝臚」に同じ。

【補説】図は、夢の中で馬に乗り双頭の人物を追いつく様子。

状元唐文獻

萬曆十四年丙戌 廷試袁宗道等三百五十人、擢唐文獻第一。^{注①}
按、文獻、字元徴、號抑所、直隸華亭人。父進士、好施予。自少有深沈之資、十五歲入泮、雅量篤學、善屬文。夢中順天試、遂發奮入國學、愈潔己好脩。常夢月中金花燦爛、頃之、滿身。又夢龍浴於室。有徽友夢唐云、余卷已入茲寧宮、奈何首唱。年三十八。



万曆十四年（一五八六）、殿試に臨んだ士人は袁宗道（字は伯修、公安の人）等三百五十人であり、唐文獻を第一位に選んだ。

考えるに、文獻は、字は元徴、号は抑所で、直隸華亭の人である。父は進士で、「他人への」ほどこしを好んだ。「文獻は」若い頃から落ち着いた性格で、十五歳で学校に入ると、度量が大きく勉強熱心で、優れた

文章を書いた。順天郷試に合格する夢を見て、かくて発憤して国子監に入ると、ますます清廉にすっかり徳を修めた。常々月の中で金花がまばゆい光を放つ夢を見、しばらくすると体中が光り輝いた。さらに、部屋で龍が水浴びする夢を見た。ある徽州の友人は、唐が「私の答案は既に慈寧宮に入っており、真つ先に名前を呼ばれるのはどうしようもない。」と語る夢を見た。「状元になった時」三十八歳であった。

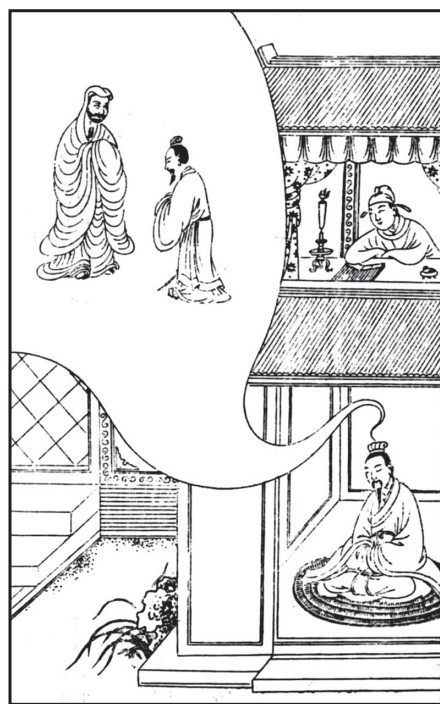
【注】①三百五十人……張朝瑞撰『皇明貢舉考』巻九によると、この科の進士は三百五十一名であった。②慈寧宮……慈寧宮のことか。待考。

【補説】図は、月の中で金花がまばゆい光を放つ夢を見る様子。図には「元吉」の署名がある。

狀元焦竑

萬曆十七年己丑 廷試陶望齡等三百五十人、擢焦竑第一。

按、焦竑、字弱侯、號漪園、應天旗手衛人。少負大志奇才、每試輒冠多士。督學耿公^②唱明道學、公從之聞道甚蚤。常稱此生宿學懿行、當魁海內。未第時、館閣諸公慕其名行、皆重之。赴會試、寓燕市祖師廟、道士夢神告云、廟中有大狀頭相公。是科果首唱。是年五十一。



万曆十七年(一五八九)、殿試に臨んだ士人は陶望齡(字は周望、会稽の人)等三百五十人であり、焦竑を第一位に選んだ。

考えるに、焦竑は、字は弱侯、号は漪園で、応天府旗手衛の人である。若い頃から大志と優れた才能があり、試験の度に多くの学生の中で首席となった。督学の耿公は道学を唱導しており、公は耿公について非常に早くから道学を学んだ。「耿公は」常々この学生は学識がゆたかで行いも立派であり、きっと天下の状元になるであろうと賞賛していた。まだ進士となる前から、翰林院の諸公は彼の名声と徳行を慕い、みな彼のことを重んじた。会試に赴いて、燕市の祖師廟に宿ると、「廟の」道士は、神が「廟中に大状元となるお方がおられる。」と告げる夢を見た。この科では果たして首席であった。この時五十一歳であった。

【注】①三百五十人……張朝瑞撰『皇明貢舉考』巻九によると、この科の進士は三百四十七名であった。②督學耿公……耿定向、字は在倫、号は天台、黄安の人、嘉靖三十五年進士。明末の著名な思想家。『明儒學案』巻三十五「泰

州学案四」に伝がある。③館閣……翰林院のこと。④燕市祖師廟……燕市は北京のこと。「祖師廟」については待考。⑤相公……生員のことをいう。

【補説】図は、燕市の祖師廟の道士が夢を見ている場面。

狀元翁正春

萬曆二十年壬辰 廷試吳默等三百人、擢翁正春第一。

按、正春、字兆震、號青陽、福建懷安人。生時火光滿堂、焰至榻前、經宿始散。己卯、領鄉薦后、以父命就漳郡龍溪教職、督學耿公大奇之。郡守李公望見紫雲起學宮、意漳士是科有取鼎元者。起送科舉日、命粧蟾宮^{※注④}拆桂、極其華麗、期以先登人見者、卜之。俄而先登者翁也。父亦任延平教職。元旦、夢人贈彩帳、其上書以娣元吉四字。郡守周解曰、以娣乃易帝乙歸妹爻辭^{注⑤}、元吉爲狀元吉兆。郎君首唱奚疑。是科、內閣取進御第一^{注⑥}洪啓濬也。未唱第、洪夢清源山神、與五虎山神戰不勝^{注⑦}。聖上竟以翁易洪、而眞洪二甲第一。夢之驗如此。是狀元之得、固山川之力也。豈清源氣運未至狀頭、將有待而然耶。

【校勘】「拆」は「折」の誤り。



萬曆二十年（一五九二）、殿試に臨んだ士人は吳默（吳江の人）等三百人であり、翁正春を第一位に選んだ。

考えるに、正春は、字は兆震、号は青陽、福建懷安の人である。誕生した時、火の光が堂に満ち、炎が寝台の前にせまり、一晚たつてようやく散じた。萬曆七年、郷試に挙げられた後、父の命で漳州府龍溪県学の教職に就くと、督学の耿公が才能を大いに買ってくれた。知府の李公（未詳）は紫雲が学宮にわき上がっているのを望み見て、漳州の士人がこの科で状元の榮譽を獲得するだろうと思った。「学生を」科挙に送り出す日に、「科挙に合格して榮華を極めた時の装いをして来なさい。」と言ひ、最初に参上した者が「狀元だと」予想していると、まもなくして最初に登って来たのは翁であった。父もまた福建延平府の教職に任じられていた。元旦にある人が、彩色のとばりを贈ってくれる夢を見たが、それには「以娣、元吉」という四字が書かれていた。知府の周解（伝未詳）は、『以娣』とは要するに『易経』に言う『帝乙歸妹』の爻辞です。『元吉』とは狀元となる吉兆です。ご令息が狀元となることは疑い

ないでしょう。」と言った。この科では「読卷官の」内閣大学士が皇帝に進呈した第一位は洪啓濬（南安の人）であった。まだ合格順位が発表される前、洪は清源山の神が、五虎山の神と戦って勝てない夢を見た。皇帝は結局、翁を洪に代え、洪を第二甲第一名においた。夢の靈驗はこれほどであった。これは状元を獲得したのが、きつと山川の力によるものであったということである。どうして清源山の運氣がまだ状元に届いていないのに、「清源の氣を受けた者が」待ち受けてなれるはずがあるうか。

【注】①三百人……張朝瑞撰『皇明貢舉考』巻九によると、この科の進士は三百四名であった。②鼎元……状元。③起送科舉……郷試受験に送り出すことを言うのであろう。④蟾宮折桂……科舉に合格すること。⑤

易帝乙歸妹爻辭……『易経』泰卦・六五。「帰」は嫁ぐの意。殷の帝乙が妹を降嫁させたように、君主が賢臣を優遇すること。⑥内閣取進御第一……「丁士美」の条参照。⑦唱第……伝臚に同じ。『明史』巻七十「選舉二」に、「廷

試用翰林及朝臣文學之優者、爲讀卷官。共閱對策、擬定名次、候臨軒。或如所擬、或有所更定、傳制唱第。」とある。⑧清源山神、與五虎山神戰不勝……清源山は福建泉州の北郊にある山。五虎山は福州の東南にある山。

【補説】図は、知府李公の命に従って真つ先に参上した様子を描いたものか。

狀元朱之蕃

萬曆二十三年乙未 廷試湯賓尹等三百人、擢朱之蕃第一。^{注①}

按、之蕃、字元介、號蘭嶠、直隸錦衣衛人。父夢東方朔送一大桃而生。^{注②}

屢試必先、選貢遊南雍、屢擢元。嘗夢神贈聯、光騰劍鏑三千丈、風送鶯

聲十二樓、扶鸞詩、蛟龍吞海日、鵷鳳出岐山、萬里長安道、三千爾獨先。^{注③}未第時、讀書於寧國寺、忽見齋中紅光、壁有題云、萬方寶曆開八

運、一躍金鱗奮九天。^{注④}其事甚奇。甲午、領薦應天。乙未會試、主人夢朱養淳至其家、明日朱公入宿。與夢姓符。及 廷試第一、則乙未狀元。又與癸未狀元符矣。始悟八運者、萬曆第八科也。一躍金鱗者、龍頭之兆也。乙未屬金之年也。^{注⑤}時年三十五。

是科榜眼孫慎行、探花湯賓尹、俱自南都聯捷。即甲午年九我李公典試所舉士也。亦盛矣哉。



萬曆二十三年（一五九五）、殿試に臨んだ士人は湯賓尹（字は嘉賓、宣城の人）等三百人であり、朱之蕃を第一位に選んだ。

考えるに、之蕃は、字は元介、号は蘭嶠、直隸錦衣衛の人である。父が東方朔から大きな桃を一つおくれる夢をみてから生まれた。試験の度に首席となり、貢生に選ばれ南京国子監で学ぶようになって、しばしば首席になった。かつて夢で神が、「光は剣の刃に躍ること三千丈、風は鶯の声を送ること十二樓」という対句を贈ってくれた。扶鸞詩で占ってみると、「蛟龍が海上の太陽を丸呑みにすると、鳳の雛が岐山から現れる、万里の長安（都）への道は、汝が一人で三千里を先行する」

とのことであつた。まだ及第する前、寧国寺で勉強に励んでいると、たちまち書斎の中に赤い光が見え、壁に「聖天子の御代に八つめの運を開き、一たび金の鱗を躍らすや九天を震わす」と「対句が書かれていた」。大変不思議なことであつた。万暦二十二年に応天府郷試に挙げられた。二十三年の会試では、「宿の」主人が朱養淳（名は国祚、万暦十一年状元、既出）が家にやってくる夢を見て、翌日朱公が宿を借りにきた。夢「で見た朱」と姓が符合した。廷試で第一位になったということは、つまり乙未の状元である。また癸未の状元「朱養淳」と「十二支が」合致した。「そこで」はじめて「八運」というのは、万暦の第八科であり、「一躍金鱗」とは、龍頭（状元）の予言であることを悟った。乙未は金の年である。この時三十五歳であつた。

この科の榜眼は孫慎行（字は聞斯、武進の人）で、探花は湯賓尹であり、ともに応天府の郷試から連続して合格した。万暦二十二年に李九我公（既出）が主考官としてとつた士人にはかならない。なんと盛んなことであろう。

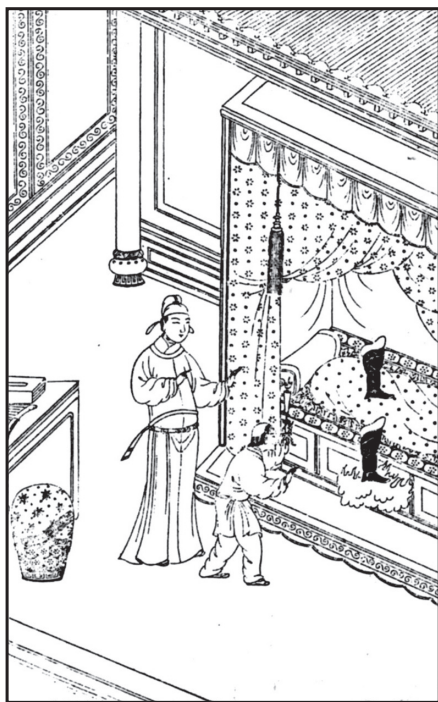
【注】①三百人……張朝瑞撰『皇明貢舉考』卷十によると、この科の進士は三百四名であつた。②東方朔送一大桃……東方朔については、『史記』滑稽列伝、『漢書』の本伝等参照。数々の奇行で知られ、西王母から桃の実を盗んだ話が諸書に見える。③光騰劍鏢三千丈……（訓読）「光は劍鏢に騰ること三千丈、風は鶯の声を送ること十二楼」④扶鸞……「扶乩」に同じ。占いの一種。⑤蛟龍吞海日……（訓読）「蛟龍は海日を呑み、鵬鳳は岐山に出ず、万里の長安道、三千をば爾独り先せん」。⑥寧国寺……揚州府にあった寧国寺のことか。⑦萬方寶曆開八運……（訓読）「萬方の宝曆は八運を開き、一たび金鱗を躍らすや九天を奮わす」⑧乙未屬金之年也……乙未が金に属するというのはよくわからない。

【補説】図は、朱之蕃が寧国寺の壁に突然現れた対句を見て驚く様子。

状元趙秉忠

萬暦二十六年戊戌 廷試顧起元等三百人、擢趙秉忠第一。按、秉忠、字季卿、號岐陽、山東益都縣人。少負奇才、以公輔自期。髫齡時、青郡太守唐維城公試而奇之曰、此東齊白眉也。上春官、響卜、福建解元作狀元。乃辛酉閩解元、實與公同名姓焉。忽一日、于旅邸見雙靴自躍上床。既而果甲天下。趙君仙才雋抱、翹楚東魯、一發而魁鄉書與禮闈、策大廷冠多士。蓋自韓城武、馬臨胸而後、青士之鼎元、凡三出矣。

是年及第、俱由諸生連捷、亦一奇也。



万暦二十六年（一五九八）、殿試に臨んだ士人は顧起元（字は太初、江寧の人）等三百人であり、趙秉忠を第一位に選んだ。

考えるに、秉忠は、字は季卿、号は岐陽、山東益都県の人である。若

い頃から優れた才能を自負し、自ら天子の補作役となると決めていた。子供の時、青州府の知府唐維城公(字は邦翰、号は両峯)が試験して彼の才能を賞賛して、「この子は東齊の白眉だ。」と言った。会試を受験する際に、響卜を行うと、福建の解元が状元になると出た。なんと嘉靖四十年(一五六一)の福建の解元は、実に公と同名同名であった。突然ある日のこと、旅館で一足の靴が勝手に寝台に躍り上がるのを見た。間もなくして果たして状元となった。趙君の優れた才能は傑出しており、東魯で抜きんでおり、ひとたび世に出ると郷試と会試では経魁となり、廷試の対策では大勢の士人の中で第一位となった。思うに、韓城武、馬臨胸より後、青州府「出身」の状元が、全部で三人出た。

この年の「会試・殿試の」及第は、生員「の童試から」連続合格であったというのも、珍しいことであった。

【注】①上春官……春官は『周礼』の官名で礼法を司った。ここでは会試を主催した礼部のこと。②響卜……拙訳一の一七頁「任亨泰」に既出。③辛酉閏解元……同名同名の趙秉忠は、万暦二年に第三甲で進士になっている。④郷書……郷試に合格すること。『周礼』「地官・郷大夫」に見られる制度を典拠とする。⑤韓城武……武城の韓克忠。拙訳一の二〇頁参照。⑥

馬臨胸……臨胸の馬愉。拙訳一の三〇頁参照。

【補説】図は、趙秉忠が旅館で一足の靴が寝台に躍り上がるのを目にする場面。ちなみに、趙秉忠の殿試の答案は現存しており、二〇〇三年に杭州出版社から複製が出版されている。

狀元張以誠

萬曆二十九年辛丑 廷試許獬等三百人、擢張以誠第一。
按、以誠、字君一、號瀛海、直隸青浦縣人。自幼英敏、日誦數千言。爲諸生時、學院柯公閱其試卷云、天下奇才。大廷獨對、舍子其誰。選貢南雍。鄉薦魁京闈。嘗讀書雲間精舍、夢身騎金牛、有空中人呼曰、長安春獨早走馬看花歸。蓋金牛乃兆辛丑狀頭也。至京會試、夢一角獸觸己、已跨而上。是科許獬會元、己爲狀元。



万暦二十九年(一六〇一)、殿試に臨んだ士人は許獬(字は子遜、同安の人)等三百人であり、張以誠を第一位に選んだ。

考えるに、以誠は、字は君一、号は瀛海、直隸青浦県の人である。幼い時から鋭敏で、一日に数千言が暗誦できた。生員であった時、提学の柯公(未詳)は彼の答案を見て、「天下の奇才である。君を置いて誰が『将来』朝廷に一人召し出されて帝のご下問にお答えすることができよう。」と言い南京国子監の貢生に選抜した。郷試では応天府で第一位であった。かつて雲間(江蘇松江)の学舎で読書をしていると、「い

う」夢を見た。金牛に跨っていると、空から、「長安の春にひとりいそいで馬を飛ばして花を見て帰るのですか。」と呼ぶ人がいた。要するに、金牛は辛丑（万暦二十九年）の状元の予言であった。都に行つて会試を「受験する」際、「こういう」夢を見た。一角獣が自分を角で突くので、「それに」跨つて「空に」上った。この科は許獬が会元で、自分は状元であった。

【注】①學院……提学のこと。②獨對……単独で召され皇帝の問いに答えること。

③京闈……ここでは応天府（南京）貢院ととつた。順天府（北京）貢院の可能性もある。

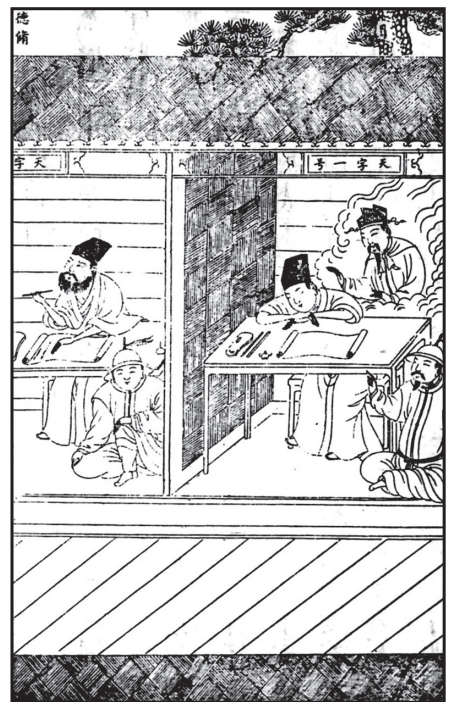
④金牛乃兆辛丑狀頭……拙訳二の四九頁「王華」の条参照。⑤一角獣……伝説上の神獣である獬のことであろう。獬は、会元許獬の名。

【補説】図は、張以誠が雲間の精舎で見た夢の内容を描いたもの。

狀元楊守勤

萬曆三十二年甲辰 廷試楊守勤等三百人、擢楊守勤第一。

按、守勤、字克之、號昆阜、浙江慈溪人。爲人曠達、多大志。每見題咏云、鄴架抽繡嫌日短、吳鉤拂拭引杯長、五陵俠氣輕喪馬、三峽詞源倒玉霜。嘗訪友于官、嘆曰、富貴吾所自有、何以人爲。其自負如此。每試首選。丁酉春、夢元峰袁公招飲。經會元及第牌坊頂上過、抵袁宅、遜之上座。袁前丁酉鄉薦第二、公後丁酉第三。將謂不驗、今撥殿元、視袁公探花、果高出其右矣。甲辰場前一日、自夢舉聯元。同袍置酒爲賀、盡醉而罷。及入場、醉甚、試日熟睡不醒。夢有人推曰、君可脫藁矣。覺、足下踰著一卷春秋。蓋二名魯史也。盡符其夢。



万暦三十二年（一六〇四）、殿試に臨んだ士人は楊守勤等三百人であり、楊守勤を第一位に選んだ。

考えるに、守勤は、字は克之、号は昆阜、浙江慈溪の人である。心が広く物事にとらわれない人柄で大きな志を抱いていた。いつも見る題詠に、「豊富な蔵書を取り出してひもとくと日が短いのが恨めしい、刀剣を拭い杯を手にしてじつくりと飲もう、五陵の「貴族の」勇ましい男気は軽々しく馬を喪い、三峽の「文人の」わき出る詩文の才能は駿馬をも倒す」とあった。かつて役所に友人を訪ねると嘆じて言った、「富貴は自分でつかむもの、どうして他人が与えてくれようか。」と。その自負たるやこれほどであった。試験のたびごとに首席となった。丁酉の春、袁元峰公（名は煒）に酒席に招かれる夢を見た。「会元及第」の牌坊の上を過ぎ、袁の邸宅に着くと、彼に上座が譲られた。袁は前の丁酉（嘉靖十六年）の郷試の第二位で、公は後の丁酉（万暦二十五年）の第三位であった。予兆が外れたんだろうかと思っていたが、今状元に抜擢されたのは、袁公の探花に比べると果たしてはるかにその上をゆくものであつた。

た。万暦三十二年の会試の一日前、会元・状元に続けざまに挙げられる夢を見た。親しい友人が酒宴をもうけて祝ってくれ、すっかり酔っぱらって「宴を」終えた。試験場に入った時も酔いがひどく、試験の日には熟睡したまま目が覚めなかった。夢の中である人が「彼の背中を」推して、「君」「答案を」完成させなさい。」と言った。目が覚めると、足下に『春秋』一巻を踏みしめていた。なんと、「夢で見た」二人は魯の史官であったのだ。「結果は」ことごとくその夢に符合した。

【注】①鄴架抽繡嫌日短……(訓読)「鄴架を抽繡するに日の短きを嫌む、呉鉤をば払拭して杯を引くこと長し、五陵の俠気は軽々しく馬を喪い、三峽の詞源は玉霜をも倒す」「鄴架」は書物の多いこと。唐の李泌の故事にちなむ。「呉鉤」は刀剣の名。「五陵」は漢代の五人の皇帝の陵墓があった場所。この付近には当時の有力者が多く住んでいた。「三峽」は長江上流にある急流の難所。古来、多くの文人が詩文に詠った。「詞源」は文詞の源。「玉霜」は駿馬の意。

②足下踰著一卷春秋……『春秋』が彼の専経(本経)であったのであろう。

③二名魯史……魯史とは、当然『春秋』との関係による。

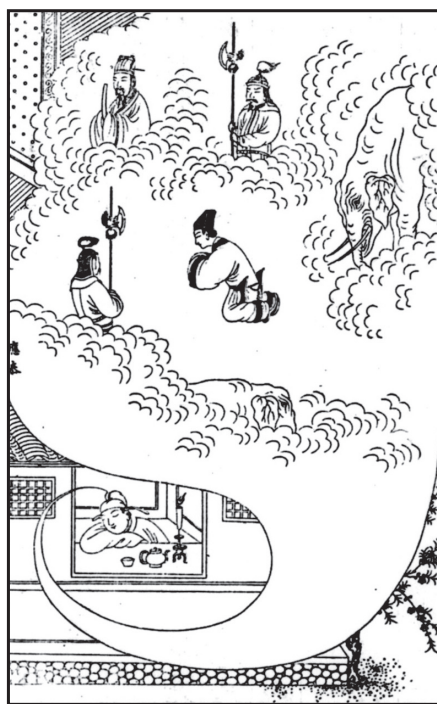
【補説】図は、会試の試験の日に見た夢の内容を描いたもの。会試の号舎を描いているが、絵の内容には錯綜が見られるように思われる。図には「徳脩」の署名がある。

狀元黃士俊

萬曆三十五年丁未 廷試施鳳來等三百人、擢黃士俊第一。

按、士俊、字^{注①}、號象南、廣東順德人。少負偉志、抱奇才、尤敦孝悌。蚤歲入泮、督學許尚志公羨其文、且貴其品。屢試冠多士、每以大魁期之。年二十七、領鄉薦、赴京會試、途中聞兄病篤、嘆曰、惡得急功名而緩吾兄哉。遂速歸。丙午冬、北上將至 京、夢入 殿庭、拜高皇帝^{注②}。

帝曰、汝來耶。今首用汝矣。及 廷試、條對稱 旨、卷字精楷、擢第一。其夢果驗。許公誠知人云。時年三十一。



万暦三十五年(一六〇七)、殿試に臨んだ士人は施鳳來(字は羽王、号は存梅)等三百人であり、黃士俊を第一位に選んだ。

考えるに、士俊は、字は「亮垣」、号は象南、廣東順德の人である。若い頃から大志を抱き、優れた才能を有して、非常に孝悌に篤かった。年少で入学すると、督学の許尚志公(伝未詳)は彼の文章を称賛し、かつ彼の人品を尊んだ。度々試験で多くの士人の首位になり、「公は」常々彼に状元を期待した。二十七歳で郷試に合格し、会試で都に赴いたが、道中で兄が危篤であると聞き、「どうして功名を急いで兄さんのことをゆるがせにできようか。」と嘆じて、そのまま速やかに帰郷した。万暦三十四年の冬に、北上して都に到達する直前、宮殿に入り、高皇帝に拝謁する夢を見た。高皇帝は、「その方、来たか。今こそお前を首席にしてやろう。」と言った。殿試では、対策「の内容」が皇帝の意向にかなない、答案の文字は精確な楷書で、第一位に拔擢された。その夢が果

たして現実となったのである。許公は本当に人を見る目があった。この時三十一歳であった。

【注】①字……このあと二字分の空格がある。なお、黄士俊の字は亮垣。

②高皇帝……太祖高皇帝、朱元璋のこと。

【補説】図は、夢の中で洪武帝にまみえる様子を描いたものか。図には「應泰」の署名がある。

【附記】本稿は、平成二十二年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「科学文献による明代中国の思想史と社会史」（研究代表者…東北大学教授 三浦秀一）による研究成果の一部である。